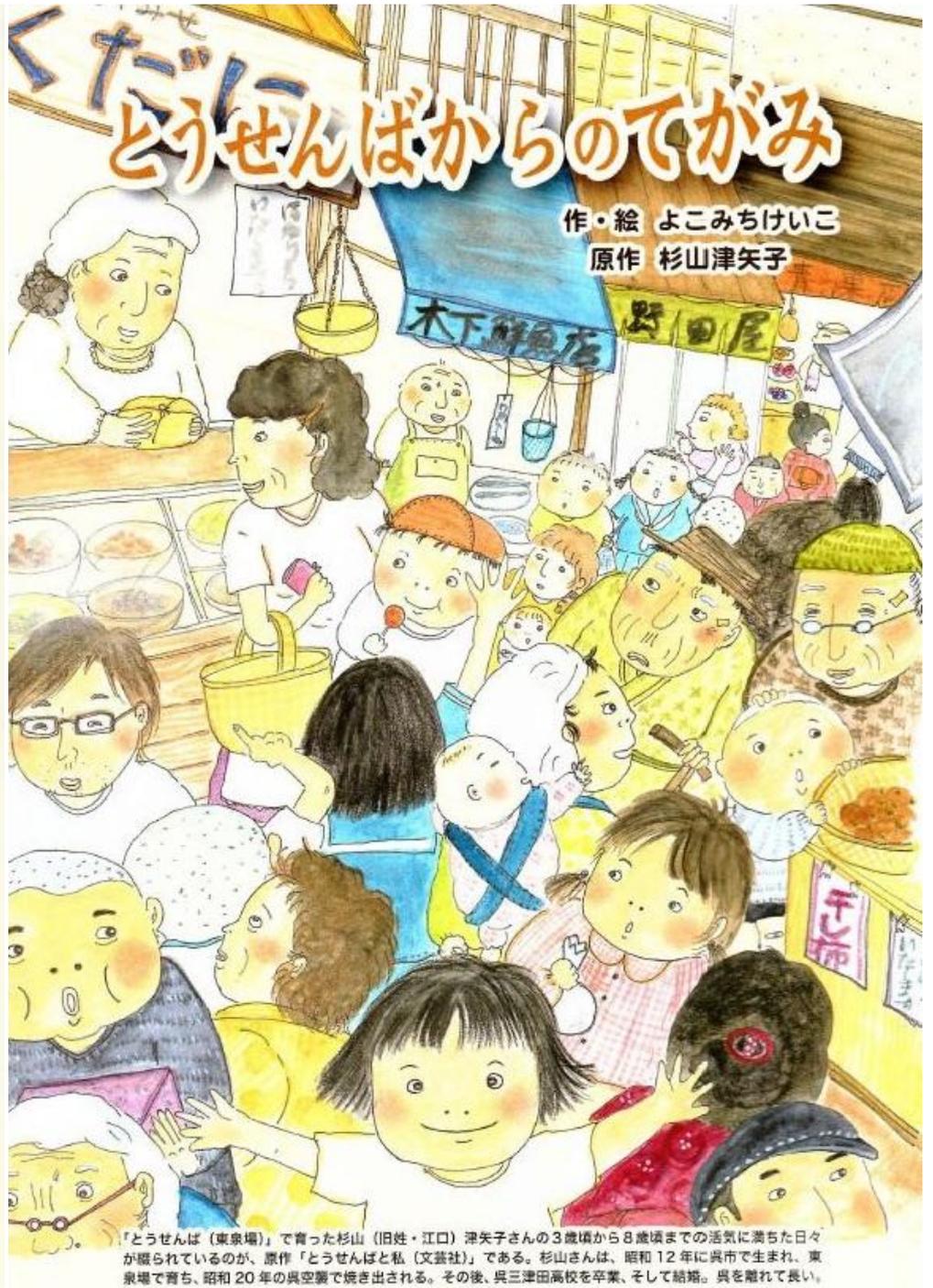


「どうせんばは「はしや」のまじけにあめ
にぎやかなしょうてんがいのなまえです。
「おがちゃん、なんで どうせんばっていつの〜」
「どうせんばはむちで
とおれないくらしひとがたくさんで
にぎやかだからだよ」



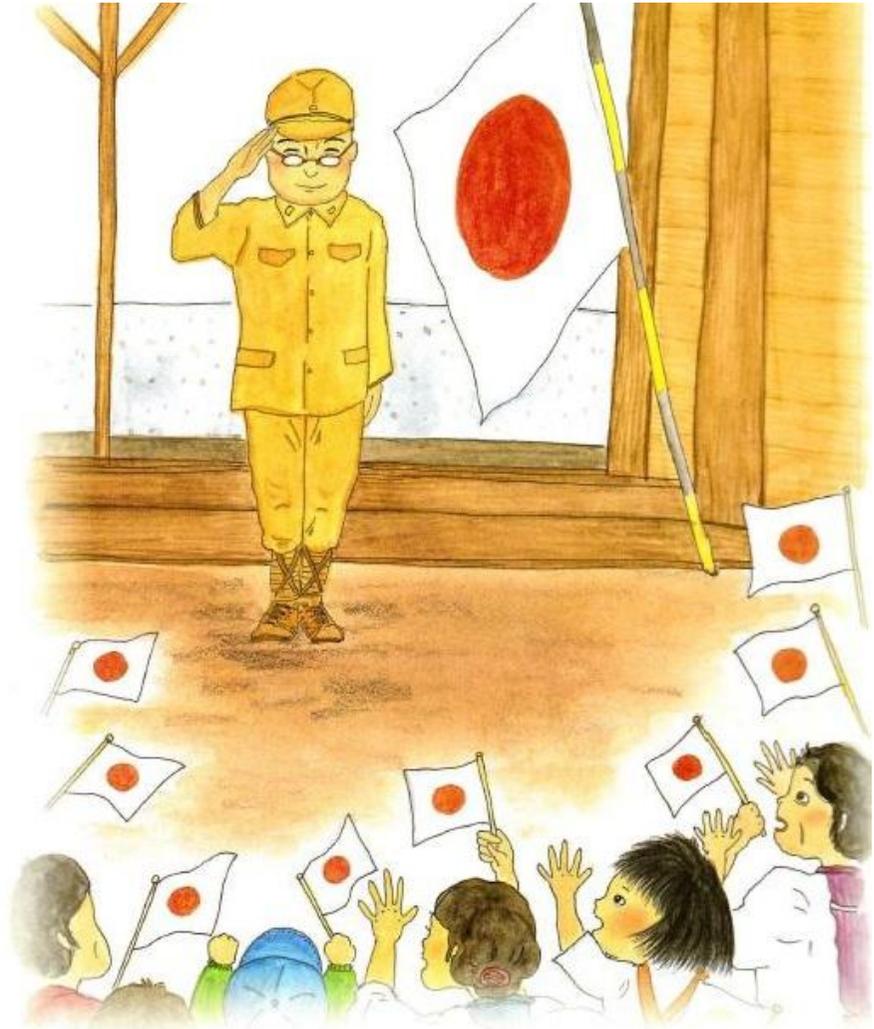
「どうせんば（東京場）」で育った杉山（旧姓・江口）津矢子さんの3歳頃から8歳頃までの活気に満ちた日々が綴られているのが、原作「どうせんばと私（文芸社）」である。杉山さんは、昭和12年に呉市で生まれ、東京場で育ち、昭和20年の呉空襲で焼き出される。その後、呉三津田高校を卒業、そして結婚。呉を離れて長い。

てがみを だして
 なんとちかたちました。
 「つやちゃん、
 げんきないねえ。
 どうしたん？」
 だがしやの
 おばあちゃんが
 いいました。
 「おにいちゃんから
 おてがみこないんだあ。」
 「いまは
 なかなかてがみが
 とどかない ときだからねえ。
 わしの むすこも
 げんきかどうか
 わからんのよ」
 おばあちゃんも
 さみしそうにいました。



つやは
 まだじがじょうずな
 かけないので
 ちよっとだけ
 てがみを かきます。
 「へんじ たのしみだなあ」





つやこの
おにいちゃんは
せんそうに
いっています。
「ゆうにいちゃん、
ゆうにいちゃんー」
えきで みおくった
ひのことを
つやはよく
ゆめに みます。
ゆめのなかで
おにいちゃんは
いつも きりりっと
かっこよくて
にこにこ
わらっています。



おつかいの
かえりみち、
「つやちゃん、
そんなに
あわててどうしたん？」
「うじくんの
おばあちゃんに
よびとめられて
「おにいちゃんから
てがみがきたんよ！
はようかえって
おかあちゃんに
よんでもらうんじゃ」



つやは
すくに
へんじを かきます。

ゆうにいちゃんへ
おてがみうれしかったよ!!!
たべものがへっこまいて、つやは
おやつがなします。ごみどりちゃん
おばあちゃんがみりん、ほろけーきを
つくってくれ、ほろおちさうになっ
ふにいちゃん、ちゃんとたべますか?

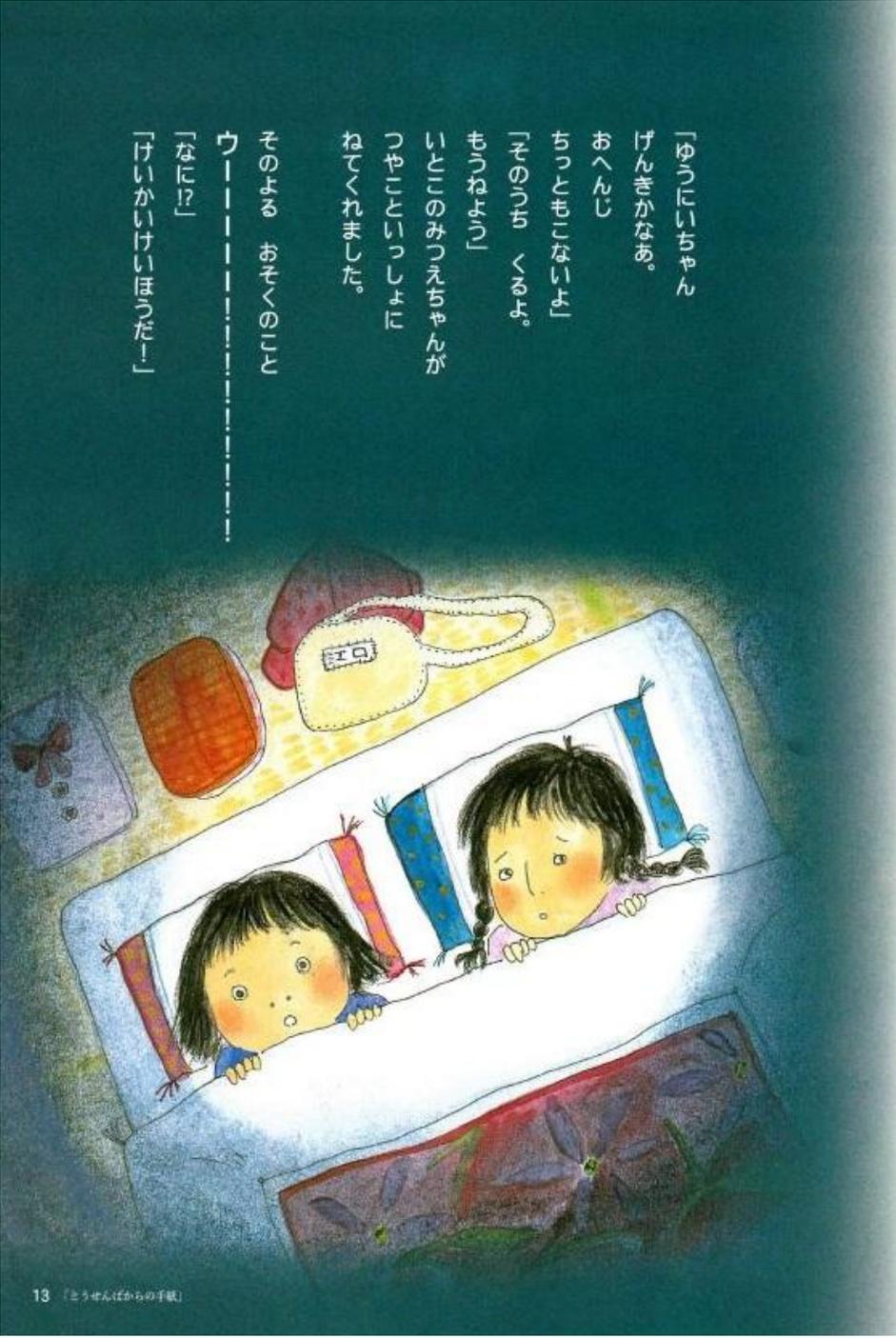


せんそうは どんどん はげしくなってい
 とつせんばも ひとが
 だんだん へっていきました。

ゆうにいちゃんへ
 みんなで、まきをちぎる
 れんしゅうをしたよ。
 やー!! と
 おおきなこえで
 こくんだよ。
 こやこも、おくんのために
 がんばっているよ。
 ↑どが、さ ↑たけかり

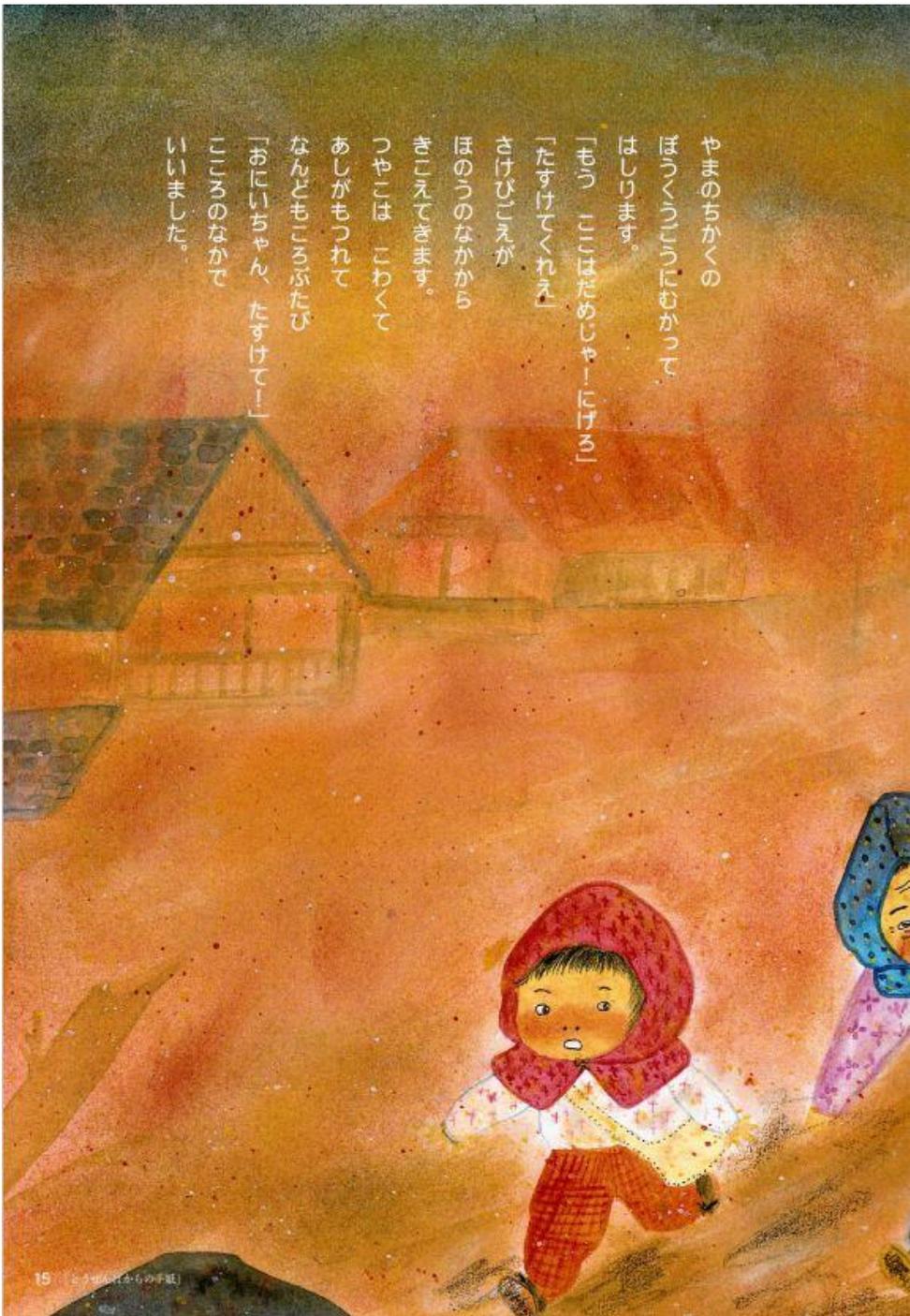
「でんせんとほするひとが いないね。
 とつせんばじゃ ないみたい」

「な」
 「な」
 「けいかいけいほうだー」
 そのよる おそくのころ
 ウー
 もつねみ「このみつえちゃんが
 つやごといつしよに
 ねてくれました。」
 おへんじ
 ちつとまこ「ないよ」
 「そ」のつす「お、お、お」
 「な」

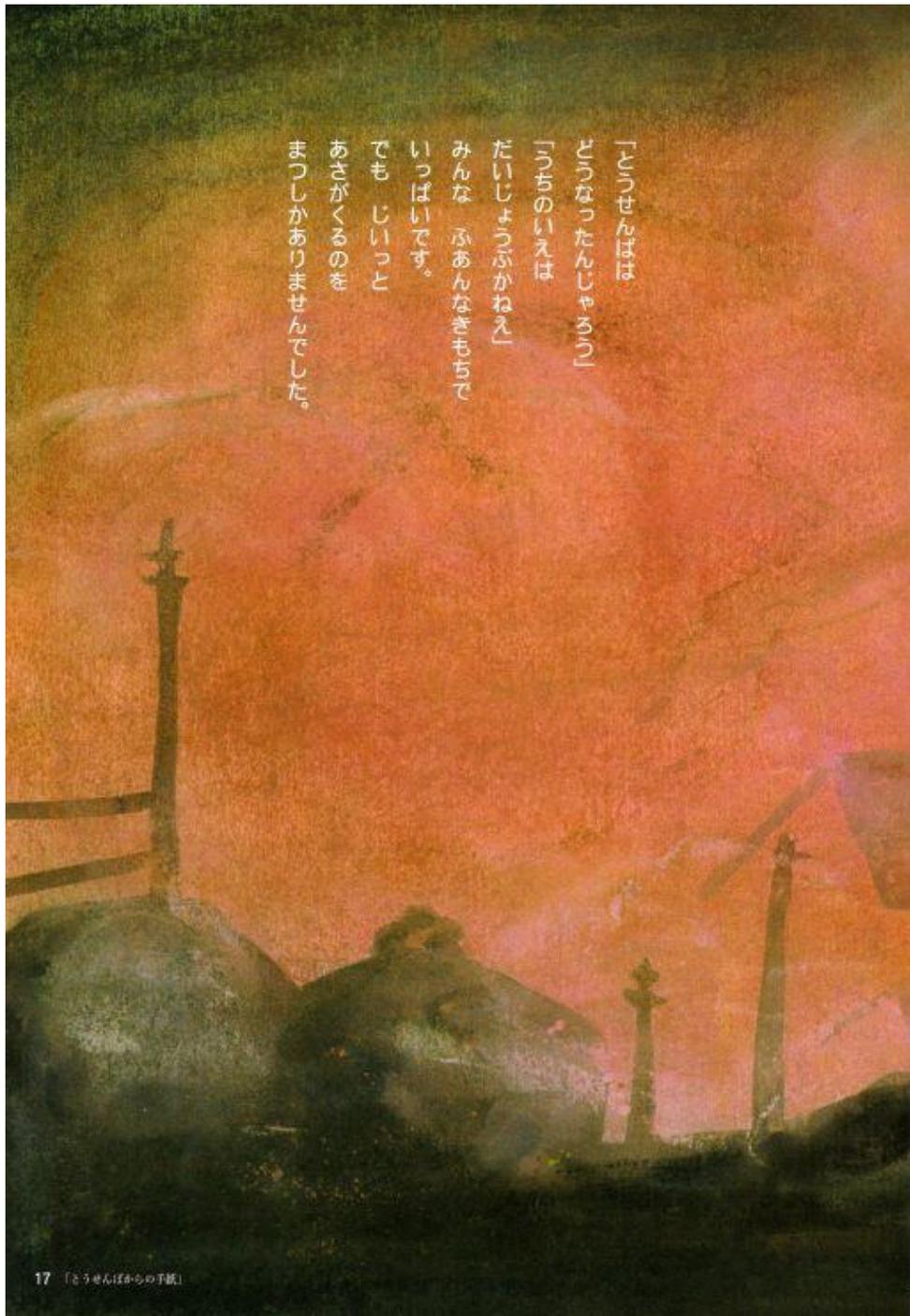




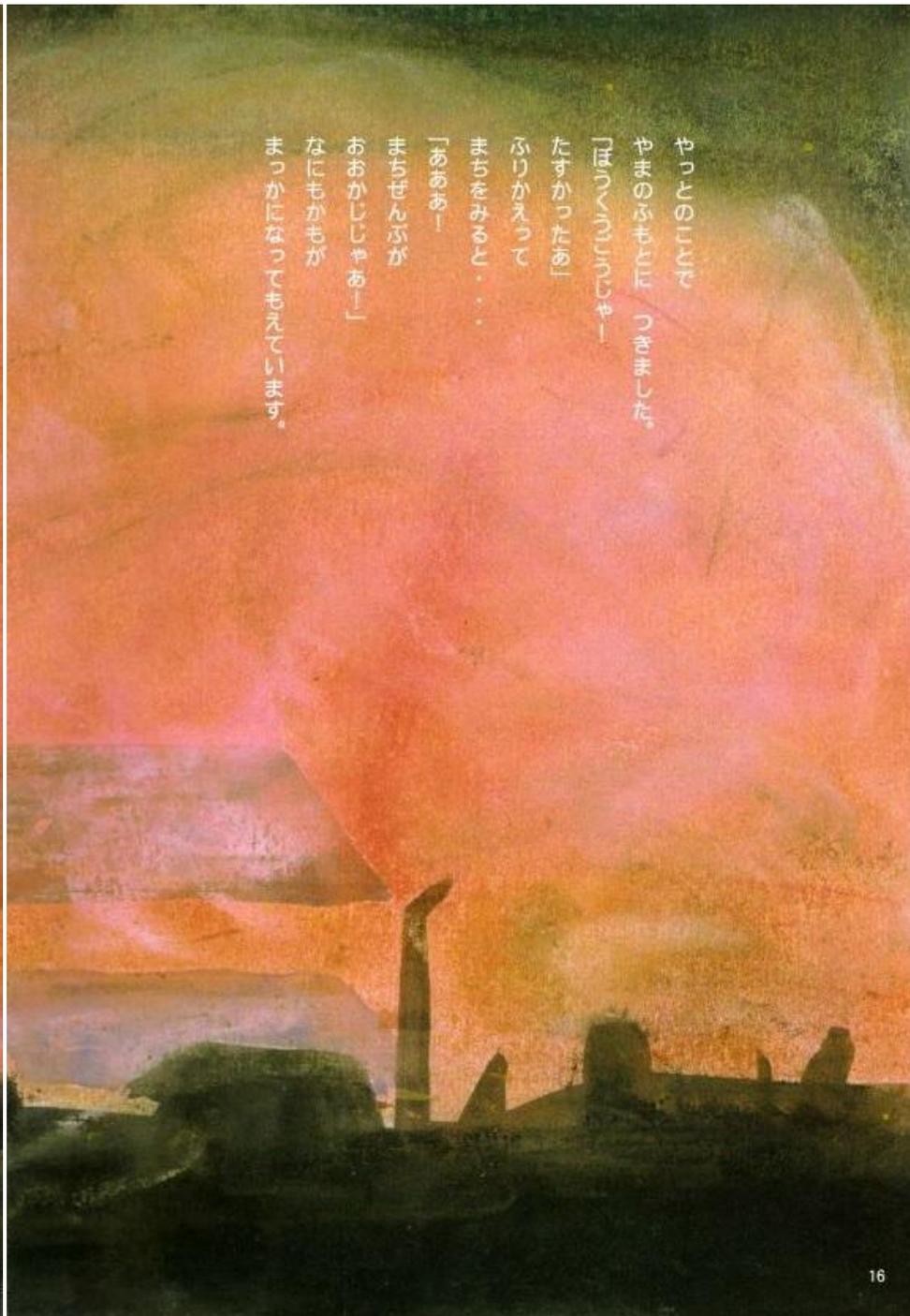
あわてて
そとにでるよ
「たすけて、たすけてー」
いっばいじゃあー」
あめのおうご
ばんだんが、おちてきて
そらが、まっかに
もえています。
「こわいよー」
「じやちゃん、はやくー」



やまのちかくの
ぼつぐつぐつとむかって
はしります。
「せー、せーはだめじゃー」にける
「たすけてくれえ」
さけびこえが
ほのうのなかから
きこえてきます。
つやは、こわくて
あしがもつれて
なんどもころぶたび
「おにいちゃん、たすけてー」
こころのなかで
いいました。



「とつせんはは
どうなったんじゃるつ」
「うちはいえは
だいじょうぶかねえ」
みんな ふあんなきもちで
いっぱいです。
でも じいっと
あさがくるのを
まつしかありませんでした。

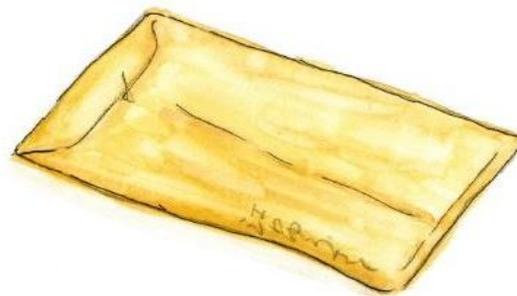


やまのふもとに つきました。
「ほつへつ」つじやー
たすかったあ
ふりかえつて
まちをみると・・・
「あああー」
まちせんぶが
おおかじじゃあー」
なにもかもが
まっかになつてもえています。

[絵本の作者]

よこみちけいこ

1972年広島県呉市出身、呉市在住。呉市立辰川小学校、片山中学校、広島県立呉三津田高校、大阪教育大学芸術学コース卒。二児の母として子育てのかたわら、創作活動をしている。主な作品に「ばらのことり」（月刊こどものとも 567号福音館書店）、「ひみつのたからさがし」（ポプラ社）、「ものしりひいおばあちゃん」（絵本塾出版）紙芝居「あめがあがったよ」「たんぼにいったよ」（童心社）などがある。



東雲町

東雲町

東雲町

朝日館

山崎
下
木茂屋

豆倉屋

志新
源物店

カヤ茶

八百屋

鈴木

香南屋物

徳田

西川

茶屋

芳野

方子
善松

不任下

屋

服

曙町三丁目

曙町二丁目

川手

人

歌
木

草薙

細煮

江口

カ
映

三
道

路地

屋

路地

玉子

映

路地

路地

カラ
屋

紅
屋

空襲による焼失前の 呉市街地の写真



二河公園南側から本通小学校南側にかけて、帯状の広範囲な建物疎開地が見られる。空襲に対する街の防火対策だった。

写真協力 / 呉戦災を記録する会

この写真は、1945年（昭和20年）4月12日に米軍が偵察のためB29爆撃機を使用し、高度33000フィート（約1km）から撮影したものだ。お隣の広島市ももちろん同じように撮影された。その後呉市は数回に及ぶ焼夷弾爆撃で町は壊滅したのに比べ、広島市は8月6日の原爆投下まで、殆ど空襲はなかったのである。そのわけは、原爆による被害を正確に掴むためだったといわれている。

「呉空襲」

7月1日・2日、呉をおそったB29爆撃機は合計152機、全部で16万454発もの焼夷弾が投下されました。「とうせんば」が目標地点の中心となっていたそうです。アメリカ軍は呉のすりばち状の地形を利用し、休山周辺、灰ヶ峰

周辺から三条、中通り、本通りの中心部へと焼夷弾を落とし、市民の逃げ道を封じました。防空壕に逃げこんだ人たちも、火や煙にまかれてたくさん亡くなりました。この空襲の犠牲者は2000人以上ともいわれています。

KURE: BAN

magazine くれえばん No.340

7

2023 July

KURE: BAN
缶詰研究室 特撰

“わたしこの缶詰の
味方です”

神垣増雄
昭和20年の日記

絵本

「とうせんばがらの手紙」

編集長の鍋

木戸俊久

○月○日
今から70年前、昭和20年7月1日の夜半からアメリカ軍B29の空襲が始まった。死者2千人、家屋焼失2万戸以上、罪災者は12万人以上といわれている。
今号では、その昭和20年に呉市広町に住み、広空廠に勤務した神垣増雄さんの日記を13ページに渡って掲載した。

神垣さんは、昭和9年から37年までの日記を残している。その中の昭和20年、戦中、終戦、そして戦後の始まりの年、まさに戦災日記といえる呉の日常をありのままに記述しているのだ。

掲載した日記は1月8日の「大詔奉戴日」に際し、神風特別攻撃隊から贈られた鉢巻が手交された。から始まり、12月14日、敗戦犯罪者を徹底的に国民の前に引据へてやりたいものだ、までである。

特に興味深いことは、神垣さんが広空廠の航空機部機体製図見習工として入り、飛工研工手として終戦を迎えるまで20年間に渡り勤務したベテラン技手であったこと、そしてまた広町の旧家の当主でもあったからである。

その神垣さんの綴る文章は、広空廠の工場疎開をしなければならぬほどの戦況のことをやど町の様子、そして日常の食糧難のことを、変わらない目線で、自分の言葉で記している。日記のページをめくると、悲嘆、憤り、軽蔑、不安、絶望、希望

あきらめの感情が抑えた文章の行間からじわじわとにじみ出ているのである。

また、今号の神垣さんの日記のページの下に、昭和20年にアメリカ軍が撮影した呉の偵察写真を掲載している。

日記が書かれたときと同じくして、アメリカ軍は着々と呉と広島島の空襲に向けて事前調査をしていたのである。

アメリカ軍の冷徹な戦略は、広島への原爆投下前まで空襲を受けた呉とは別に、広島へは空襲をしていないことでも分かるのだ。原爆による市街地の損害を精度に知るためだったのである。

神垣さんの日記の原本が掲載されている「呉戦災あれから60年」という本の中に「米軍による呉市民尋問録」というページがある。昭和20年の10月から12月にかけて、アメリカ戦略爆撃調査団が呉市民に対し尋問した記録である。

Q、アメリカが日本を空襲した時、その責任はどちらの側にあると思いますか。
A、戦争中、戦争の指導者のやり方（結果）をどう思いましたか。
Q、今後日本がどう変わらなければならぬと考えますか。

など、40ぐらいの質問をまとめて尋問された50〜60人の職業は様々で、主婦や労働者、そして若者や婦もいた。

これほどまで徹底された戦略を遂行するアメリカという国のことを考えるのである。今から70年前に、すでに戦争戦略システムを作り上げていたアメリカという国は、つくづく恐ろしい国である。軍・産・学複合体国家であるアメリカのこの70年の歴史を見ると、なるほど、戦争を続けることではか国の経済を維持できないという泥沼に陥っていることが分かる。

その泥沼のアメリカにどうしてもついて行きたいのが日本の政府らしい。今、国会審議されている安保法制改正案である。自衛隊の活動を広げる、集団的自衛権行使のことは、そこで一言言われていることは、中東のホルムズ海峡が機雷で封鎖されると、日本に石油が入ってこなくなり、日本の存立が脅かされて国民の権利が覆される危険がある、とお上は申されている。

そこで思い出すのは、91年の海上自衛隊呉基地のベルシャ湾派遣掃海部隊のことである。当時の政府は高度な政治判断で掃海艇派遣が決まり、日本を離れること一萬三千km、187日の任務だった。

「疲れて帰ってきた掃海艇隊員達」という題で本誌の91年12月号に掲載したことがあるのだ。当時たまたま掃海部隊の一員として私の友人が派遣されていたことから、記事に出来たのだが、記事にしたのは食事のことなどほんのうわべのこと、実際の任務の危険な場面、目の

前で起きるアメリカ軍の戦時攻撃のことなどは、実は書けなかった。戦争の渦中に入りそうな場面は多々あったのである。

政府は、この戦争派遣がまがりなりにも成功したことから、たとえば、という言い方でホルムズ海峡封鎖を事例にするのである。

自衛隊の出動を命じる政治家たちは、多分掃海艇がどのようなカタチのものか知らないことだろう。元々掃海艇は、本来は海岸近くで行動するから排水量は500トン位と小さく、磁気には反応する機雷を避けるために、船体は木造である。ベルシャ湾までの航行そのものが危ぶまれる艇なのである。だから、食糧保存の冷凍庫も小さなもので、掃海艇は長期航海にはまるで向いていないのだ。

このままいくと、掃海艇部隊のある呉基地に、政治家たちがまたぞろ派遣を命じような気配である。

「集団的自衛権行使」の今と過去の最前線の現場に登場する主役は、実は呉基地の掃海艇部隊なのである。呉に住む隣りのおにいちゃん（自衛隊員）かもしれない。

戦争を続けなければ経済が持たないというアメリカという国家に追従したい日本の政府を、国民が認めているという現実を、同調しない人も含めて、そここのころを覚悟して暮らすしかないようである。
そんなことを考えながら、70年前の昭和20年の日記と絵本（とうせんばがらの手紙）を編集しました。